日英比較表現論（６）

南　満幸

● 要約

筆者の 40 年近い教員経験に基づいて、日本人の英語学習者の大部分がつまずくポイントを洗い出し、何故つまずくか原因を究明して、そして彼らを正しい理解に導くためにはどのような工夫が必要かを考察する。

特に、英語を日本語にあるいは日本語を英語に訳すときに障害となるのが、両言語の「発想」の違いである。その背景にある両言語の特徴を明らかにすることによって、学習者がスムーズに理解できるような説明を試みる。

また、使用頻度の高い「使役動詞」や「動名詞／不定詞」を学習者がきちんと使い分けられるようにするための教え方も工夫する。

● キーワード

発想

強制度

権利／義務関係

一般的／特定的

過去志向／未来志向

0　はじめに

筆者は、もうかれこれ40年近く、下は小学生から上は70代の方々まで英語を教えてきたが、その数百名の教え子たちの大部分がつまずくポイントがいくつかあることに気づいた。

特に、英語を日本語に（または日本語を英語に）訳すときに日本人の英語学習者が犯しやすいミスには共通のパターンが見られた。例えば、次の簡単なやり取りを英語に訳させたところ、

Ａ：アメリカの首都はどこですか。
Ｂ：ワシントンＤＣです。

下の正解に辿り着いた者はほとんどいなかったのは衝撃的であった。

A: What is the capital of the United States?
B: It's Washington, D.C.

大部分の学生は、Ａの英訳をWhereから書き始めていたのであった。これは、もちろん、日本語の「どこ」と英語のwhereが一対一対応する（＝100%同じである）と誤解していたがゆえの誤りであった。日本語の「どこ」は、返答として「場所」を要求していないときには、英語のwhatに対応するのであると説明した後で、次の英訳をさせたところ、ほとんどの学生が正解することができた。

Ａ：ブラウン教授、私のレポートのどこがいけないのですか。
Ｂ：そうだね。タイプミスが多いし、そのうえ論理的にも一貫していない。

A: Professor Brown, *what* is wrong with my paper?
B: Well. It contains a lot of typos, and moreover, it is logically inconsistent.

当然ながら、英語と日本語は非常に異なった言語であるから、たとえ単語レベルであっても一対一対応があるなどと期待しない方がいい。ましてや、文を組み立てる際の「発想」は、両言語で違って当然である。

「発想」とは、「頭に浮かんだある考えを、言葉を用いて表現する手順」のことである。もっと簡単に、「表現の方法」と言うこともできる。単に「表現」というと、言い表わされた結果としての言葉を指すが、「発想」というのは、考えが表現としての形をとっていくプロセスを指す。例えば、文を組み立てる際に、何を主語にするか、動詞はどれを使うか、どのような構文を用いるか、・・・といったところに主眼がある。

本稿では、日本語と英語のそのような発想の違いをはじめとする、日本人の英語学習者を困惑させ

る要因をいくつか紹介する。

１　英語は「HAVE 言語」、日本語は「BE 言語」

池上（1982）などによると、「HAVE 言語」とは、所有を表わすのに、そのまま所有の動詞 have を用いる言語のことで、一方、「BE 言語」とは、所有を表わすのに存在の表現（ある／いる）を用いる言語のことである。

別の言い方をすると、英語が「X は Y を持つ」と表現するのに対して、日本語は「X に Y がある／いる」という言い方を好む傾向がある、ということである。

典型的な例は、次の通り。

(1a)　He has two sons.
(1b)　彼には息子が二人いる。

(2a)　The room has no windows.
(2b)　その部屋には窓がない。

(3a)　I have a good idea.
(3b)　私に良い考えがある。

(4a)　Do you have any questions?
(4b)　何か質問はありませんか。

２　英語は名詞中心、日本語は動詞中心

英語は、名詞を中心とした構文が顕著で、主語が文構造の必須条件であるのに対して、日本語は動詞が文の中心であり、述語動詞のみで文が成立することがある。

(5a)　I have a headache.
(5b)　頭が痛い。

英語では、「私は頭痛を持っている」という発想で文を作っている。もちろん、理論上は、

(5c)　My head aches.

という英文も可能ではあるが、実際の使用頻度となると、(5a) より相当低くなるであろうと予想される。次の例も同様。

(6a)　He is a good singer.
(6b)　彼は歌がうまい。

(7a)　She is a fast runner.
(7b)　彼女は足が速い。

３　英語は肯定的、日本語は否定的

同じような意味を表現するのに、英語が positive な表現を使うことが多いのに対して、日本語の方は negative な表現を使う傾向がある。

典型的な例は、

(8a)　Do to others as you would be done by.
(8b)　己ノ欲セザル所ヲ人ニ施スコトナカレ。（孔子）

(9a)　Love me, love my dog.
(9b)　坊主憎けりゃ袈裟まで憎い。《諺》

(10a)　I Want To Live（1958 年のアメリカ映画の原題）
(10b)　「私ハ死ニタクナイ」（邦題）

(11a)　Save!
(11b)　（教室の黒板に書く）消さないでください。

(12a)　. . . if I remember right
(12b)　私の記憶に間違いがなければ・・・

(13a)　Please Use Other Doors
(13b)　このドア使用禁止

(14a)　This is the longest bridge I've ever seen.
(14b)　こんなに長い橋は見たことがない。

(14c)　これは、私が今まで見た中で最も長い橋です。
と訳せないこともないが、日本語として“かなり不自然”であることは否定できない。

４　英語は〈スル〉的な言語、日本語は〈ナル〉的な言語

日本語が「状況」が、まるで意志を持っているかのように、おのずからそう「なる」といった捉え方をするのに対して、英語は、「物」をある新しい状態に「する」といった捉え方をする傾向がある。

代表的な例は、次の通り。

(15a)　We are going to get married in June.
(15b)　私たち、6 月に結婚することになりました。

be going to の意味を考えると、「…結婚するつもりです」あるいは「…結婚します」と訳しても良さそうなものだが、日本語のネイティブスピーカーの感覚では、どうもしっくりこない、というのが率直な印象である。

いわゆる“政略結婚”など、本人たちの意思とは関係なく（または諸事情から、自然の成り行きで）そうなった、というケースならまだしも、そうでない場合でも同様。

次のケースも同様。

(16a)　We are moving out to Sapporo next month.
(16b)　来月、札幌に引っ越すことになりました。

ここでも、会社の転勤命令などの外的な要因で、否応なしにそういう流れに事が運んだケースならまだしも、自分たちの意思で転出を決めた場合であっても、「… 引っ越すつもりです」あるいは「… 引っ越します」という言い方は、日本語としては「意思が強く表われ過ぎている」という印象を受ける。

安藤（1986）に次のような記述がある。

> まず、（１）の例を見られたい。
>
> （１）　a.　Spring has come.
>
> b.　春ニナッタ。
>
> ‘Δ　has become to spring.’
>
> （１）a は、「春」という〈個体〉がこちらへやって来た、というふうに表現されている。つまり、「春」という〈行為者〉が「こちらへ来る」という行為を〈スル〉わけで、ブルームフィールドの言う、〈行為者―行為〉（Actor-action）型の、英語における愛用文型になっている。
>
> こう言えば、でも文部省唱歌には「春ガ来タ、春ガ来タ、ドコニ来タ」というのがあるじゃないかと反問する向きがあるかもしれないが、「春ガ来タ」は明らかに〈スル的〉な言語の発想であって、その証拠に、日常言語ではだれも、「*春ガ来マシタネ」とは言わな

いで、「春ニナリマシタネ」というふうに、〈ナル的〉な表現をしている。〈ナル的〉な言語である日本語の特質（genius）に適った表現は、（１）b である。つまり、「何かが春になった」というわけであるが、さて何が春になったのか、行為者はもちろん主語さえ表現されていないので分からない。（ギリシア語のデルタは、そこに語彙項目が存在しない、というふうに理解されたい。）言うなれば、時が次第に推移していって、春という季節にはいった、という感じである。

要するに、〈スル的〉な言語は、〈個体がある行為をする〉というふうに、行為者を際立たせて――つまり、文のテーマにして――表現しようとする言語であるのに対して、〈ナル的〉な言語は、行為者を表面に出さずに、あたかも〈自然の成行きでそうなった〉というふうに表現する言語であるということになる。（１）のような文は、言語類型的には、〈スル的〉な英語では１項動詞による SV 型であるのに対して、〈ナル的〉な言語である日本語ではゼロ項動詞による V 型であると言えるであろう。

安藤貞雄（1986）　『英語の論理・日本語の論理』
大修館書店　256－257 ページ

さらに、安藤（1986）は、英語は、〈スル的〉言語であるがゆえに、いわゆる「無生物主語構文」を好んで用いる、と説いている。

〈スル的〉な言語としての英語は、（１）－（３）の諸例のように、抽象的な概念にさえ動作主性（agency）を付与することができるのに対して、〈ナル的〉な言語である日本語では、それを避けて副詞的に――つまり、情況的に――表現するのが常である。

(1) a. *Failure* drove John to despair.
　　b. 失敗シテ、ジョンハ絶望シタ。
(2) a. *What* brings you here?
　　b. ドウイウ訳デ、ココニ来タノカ。
(3) a. *Pain* stung her into consciousness.
　　b. 刺スヨウナ痛ミノタメニ、意識ガヨミガエッタ。

以上のような抽象概念を主語にした諸例において、英語を直訳しても自然な日本語にならない点に注意されたい。それどころか、日本語では、（４）のような無生物（場所）はもちろん、（５）のような動物でさえ、これを動作主として表現しようとすれば不自然になるということは、驚くべきことと言わなければならない。

(4) a. The *verandah* overlooked a small garden.
　　b. *ベランダガ小サナ庭ヲ見渡シテイタ。
　　c. ベランダカラ、小サイ庭ガ見渡セタ。

(5) a. The *cat* made him a rich man.
b. *ネコガ彼ヲ金持ニシタ。
c. ネコノオ陰デ、彼ハ金持ニナッタ。

・・・《中略》・・・

では、なぜ英語は無生物主語を好むのか。

私は、この表現の特徴は、無生物まで人間化して動作主性を与え、もって英語の愛用文型の 1 つである〈行為者―行為―目標〉（Actor-action- goal）のパタンを貫徹しているところにあると考えている。

前節（２）a の例で言えば、What は〈連れて来るもの〉、you は〈連れて来られるもの〉、つまり、動作主（agent）と受動者（patient）の関係で捉えられているのに対して、それに対応する日本語では、動作主も受動者も存在しない。そして、英語の他動詞 bring に対して、日本語では「来ル」という自動詞が用いられている。言語類型学的に見れば、ここでも英語は他動詞による SVO 型、日本語は自動詞による SV 型ということになる。（英語よりも日本語の方が他動詞が少ないというのは、おそらく、正しい予測であろう。

安藤貞雄（1986）　『英語の論理・日本語の論理』
大修館書店　266－267 ページ（下線・イタリックは原著者）

５　言葉を尽くす英語、言わずに済ませる日本語

これは、特に代名詞の取り扱いにおいて顕著である。例えば、中高生に

(17a)　寝る前に歯を磨きなさい。

を英訳させたとして、

(17b)　Brush your teeth before you go to bed.

という正解に辿り着ける生徒は、私の経験上、かなり少ないと思われる。生徒たちの多くが、2 つの代名詞（your teeth の your と before 節内の主語 you）を落としてしまうのである。元の日本語では、「あなた」は一度も表に出て来ないが、英語では、この your と you は必須である。

「“brush する”のは誰の歯か？」→「“あなた”の歯です」→「分かっているなら、ちゃんと your teeth と書け」、「“寝る”のは誰か？」→「“あなた”です」→「分かっているなら、主語 you を入れよ」といった具合。特に、後者は、「英語のセンテンスは（原則として）主語が必須」という大原則にも関わってくる。

逆に、英語を日本語に訳す場合はもっと重大で、「言い方がくどい／くどくない」、「日本語として不自然／自然」というレベルでは済まない。意味を誤って伝えてしまう恐れがある。例えば、次の (18a) を日本語に訳す場合、

(18a)　Jack says that he likes dogs better than cats.
※ Jack と he は、同じ人を指すものとする。
(18b)　?ジャックは、彼は猫よりも犬の方が好きだと言っている。
(18c)　ジャックは、 φ 猫よりも犬の方が好きだと言っている。
※ 記号「φ」は何らかの要素が省略されていることを意味する。（以下同じ）

代名詞 he を機械的に「彼は」と訳出した (18b) だと、ジャックと「彼」が別の人だと誤解される恐れがあるが、従属節内の代名詞 he をあえて訳出しなかった (18c) だと、そのような誤解をされる心配はない。

安藤（1986）は次のように説明している。

> 英語やフランス語やドイツ語では、定形動詞は主語を持たなければならないという強い構造的な制約がある。
>
> (1)　a.　If John can, he will do it.
> 　　b.　*If John can, φ will do it.
> (2)　a.　It is certain that Mary is a snob.
> 　　b.　* φ is certain that Mary is a snob.
> (3)　a.　It is raining.
> 　　b.　* φ is raining.
>
> 一方、日本語では、談話の当事者（＝話し手と聞き手）を表す人称代名詞は表現されないのが規範（norm）である。
>
> (4)　a.　モウ起キタノ？
> 　　b.　ウン、モウ起キタ。
>
> において、a 文では 2 人称主語が、b 文では 1 人称主語が省略されている。日本語で 2 人称主語が省略される理由は、英語の命令文で you が省略されるのと同じである。
>
> (5)　イラッシャルナラ、参リマス。

は、「あなたが行くなら、私も行く」という意味であるが、その意味関係は、日本語では敬語法（*i.e.*「イラッシャルナラ」（＝尊敬）、「参リマス」（＝卑下））によって明瞭に表されている。

安藤貞雄（1986）　『英語の論理・日本語の論理』
大修館書店　12 ページ（下線は南）

さらに、三浦（2012）の冒頭に非常に興味深い記述がある。

アップルコンピュータの創立者、スティーブ・ジョブズ（Steve Jobs, 1955-2011）の有名なスピーチ（スタンフォード大学の卒業式で。2005 年 6 月）に、次のような一節がある（代名詞をイタリックにして示す）。

"*I*'m convinced *that* the only thing *that* kept *me* going was *that I* loved *what I* did.　*You*'ve got to find *what you* love, and *that* is as true for work as *it* is for *your* lovers."　(http://news.Stanford.edu/news/2005/june15/jobs―061505.html)

ここには I, me, you, your, that, what, it のような「代名詞」が全部で 11 個つかわれている。（このうち二つの that は「接続詞」とされるが、「代名詞」と根本的に同質であることは後述）。あらゆる英文にこれほど頻繁に「代名詞」が登場するわけではないが、英語では文をつくるうえで「代名詞」が重要な役割を果たすことがうかがえる。

同じ趣旨を日本語で表現してみると、次のようになるだろう。

「私が今日までやってこれたのは、もっぱら自分のやっていることが好きだったからです。好きで仕方がないことを探してください。好きな人がいればやっていけるのと同じように、好きな仕事があればやっていけます。」

この場合、「代名詞」に似たものは「私」「こと」「の」だけであり、英語との違いは大きい。

ジョブズのスピーチをみてもうひとつ気づくのは、ここに登場する「代名詞」は何かの〈名詞の代わり〉ではないことである。もちろん、この場合 "I" は話し手自身のことであり "you" は聴衆のことであって、それが何の〈名詞の代わり〉であるかとは無関係に文意は通じるし、that, what, it にいたっては〈代わりをしている名詞〉はどこにもない。

三浦陽一「英語の人称代名詞について」　33－34 ページ
南山大学　国際教育センター紀要　第 12 号（2012 年 3 月）

この後、話は「そもそも代名詞とは何か？」という根本的な問題にまで広がっていくのだが、紙幅の関係でここではこれ以上は触れない。特に日本語→英語または英語→日本語の翻訳の場合、I＝「私」

/ you＝「あなた」/ he＝「彼」/ … といったような単純な一対一対応で片づけられるものではない、という当然といえば当然のことを改めて肝に銘じておくにとどめる。

６　使役動詞

私の経験上、日本人の英語学習者の多くが、cause, let, have, get, make などのいわゆる使役動詞の微妙なニュアンスの違いを知らずに、いい加減に使っている。学生・生徒に何とか理解してもらおうと、工夫を重ねてきた説明を一つここで紹介したい。

使役動詞にあたる表現は、日本語では「～させる」・「～してもらう」の 2 つくらいしかないのに対して、英語では出現頻度の高いものだけでも cause, let, have, get, make の 5 つがある。よって、日本語／英語の対応だけでは区別できないのは明らかである。

まず、使役動詞を「人または事物にある行為をさせることを表わす動詞」と定義する。いわゆる「５文型」の分類に従えば、第５文型（SVOC）を作る動詞である。次に、5 つの使役動詞を C の形によって 2 グループに分ける。

第１グループ … C が原形不定詞→ let, have, make
第２グループ … C が to 不定詞→ cause, get

このうち、cause には「偶発的／無意図的」というニュアンスがあるので、次のような客観的な描写（特に、無生物主語構文）に最適である。

(19a)　The heavy rain caused the Kinu River to overflow in September 2015
(19b)　2015 年 9 月、豪雨のために鬼怒川が氾濫した。

cause を除いた 4 つ、let, have, get, make を区別する一つの基準は、「強制度」である。

低い←　　強制度　　→高い

let　　have　　get　　make

(20a)　Let me introduce myself.
(20b)　自己紹介させてください。

詳しく言うと、「私は自己紹介をしたいという願望を持っている。その願望を叶えさせてください」という意味。従って、強制度はゼロ。　(cf.)　allow O to (do)

「O（目的語）は禁止／制止／妨害さえなければ、放っておいても～する」ということなので、O

は意志を持たない“モノ”でも可。

(21a)　She let her hair grow long.
(21b)　彼女は髪を長く伸ばした。

妨害（＝カット）さえしなければ髪は自然と伸びるので、ここは let の出番である。

受動態は稀で、be allowed to (do) で代用するのが一般的。

(22a)　The evacuees from Iitate were allowed to go home for half a day.
(22b)　飯舘村からの避難者たちは、半日間の帰宅を許された。

2 つ目の have には、もう一つの要因が絡んでくる。S（主語）と O（目的語）の権利／義務関係である。どういうことか、具体的な例文で説明する。

(23a)　Mr. Smith had his students write compositions about their future dreams.
(23b)　スミス先生は、生徒たちに「将来の夢」について作文を書かせた。

「S（教師）は、例えば国語の授業の一環として、O（生徒）に C の行為（＝作文を書くこと）をさせる権利を持つ。そして、O は S の指図に従う（＝作文を書く）義務がある」と社会通念上、認められているということ。「それが世間の常識である」との認識を S と O が共有している、というところがポイントである。次の例も同様。

(24a)　He had his secretary probe into the track record of X Corporation.
(24b)　彼は秘書に X 社の業績を調べさせた。
※ 常識的に考えて、それくらいの仕事は、秘書の業務範囲内である。

(25a)　I had my family dentist remove tartar from my teeth.
(25b)　かかりつけの歯医者に歯石を取ってもらった。
※ 患者に「歯石を取ってください」と頼まれて、「いやです！」と断わる歯医者は普通いない。

(26a)　I had the janitor replace the burnt-out light bulb with a new one.
(26b)　管理人さんに、切れた電球を新しいのに交換してもらった。
※ こういった雑用をするのが、管理人の本来の仕事であろう。

受動態は不可である。また、日本語に訳す際、「～させる」・「～してもらう」という 2 通りの形が現われるが、それは本質的な問題ではない。重要なのは、あくまで権利／義務関係である。

3 つ目の get の場合は、S と O の間に（have に見られるような）権利／義務関係は存在しないため、「二つ返事で承諾してもらえる」可能性はほとんどなくて、「なだめたりすかしたりして何とか～してもらう」というニュアンスが込められている。「O が～する」という、S にとって望ましい成果を得る（＝get する）ために、それ相応の努力（言葉を尽くしての説得、懸命の試行錯誤など）をする、と考えるとよい。　(cf.)　persuade O to (do)

(27a)　I tried in vain to get my husband to quit smoking.
(27b)　旦那に禁煙させようとしたけど、無駄だったわ。
※ この例文では、「アナタの健康が心配なの。お願い、禁煙して！」という泣き落とし作戦に出たり、「禁煙してくれたら、晩酌のビールを 1 本増やすわ。どう？」とモノで釣ったりするなど、あの手この手で説得を試みたことが想像される。

(28a)　These days, governments are trying to get citizens to eat more healthily in order to cut down on medical expenses.
(28b)　近ごろ各国政府は、医療費を抑制するために、国民にもっと健康的な食生活を送らせようとしている。
※ いかに政府といえども、国民の食生活を変えさせる「権利」はないから、have は使えない。また、食生活を変えるように「強制する」こともできないから、後述の make も使えない。さらに let は論外（黙っていても国民が自発的に食生活を改善してくれるなら let だが、そのようなことはあり得ない）となれば、ここで使える使役動詞は get しかない。具体的には、健康に悪いとされる食品に新たに税金をかけたり、全国的に「食生活改善キャンペーン」を行なったり、様々な政策を立案・実行することになるであろう。

4 つ目の make は、S が人の場合は、「有無を言わさず（無理やり）～させる」という意味である。強制度は最も高い。　(cf.)　force O to (do)

(29a)　Ms. Green made Jack apologize to Mary.
(29b)　グリーン先生は、ジャックにメアリーに対して謝罪させた。
※ 「本当は謝りたくないのに…　畜生！」とでも言いたげなジャックのふくれっ面が目に浮かぶようである。

但し、S が事／物の場合は、当然のことながら、強制のニュアンスはない。

(30a)　The discovery made the researchers doubt Dr. Wilkinson’s theory.
(30b)　その発見によって、研究者たちは、ウィルキンソン博士の学説に疑問を抱くようになった。

(31a)　The movie “Grave of the Fireflies” always makes me cry.
(31b)　映画『火垂るの墓』を見ると私はいつも泣いてしまう。

make の場合、使役動詞には珍しく、受動態も普通に用いられる。但し、受動態になると、原形不定詞が to 不定詞に変わることに注意。

(32a)　I was made to wait in the anteroom for an hour.
(32b)　控えの間で 1 時間待たされた。

７　動名詞と不定詞

日本人の英語学習者がつまずきやすいポイントの一つに、「動名詞と（名詞的用法の）to 不定詞」がある。つまずく理由は明白である。両方とも、日本語では「～すること」と訳される、とだけ授業で教わったら、「ということは、この両者は全く同じ意味なのか？　だとしたら、何故一つに統合されないのか？」というふうに混乱するのは、むしろ自然である。

私は、動名詞と不定詞が出揃った時点で、まずは次のように説明することにしている。「確かに、日本語訳だけを見ると、表面的には同じに見えるかもしれないが、もっと詳しく調べると、相当大きな違いが現われてくる。例えば、・・・」

動名詞	不定詞
一般的	特定的
過去（※）志向　←	→未来志向

※ ときに現在も含む

「何のことだろう？」と学生・生徒たちが疑問に思った頃を見計らって、具体的な例文を紹介しつつ説明する、という流れで授業を進めていくことにしている。

(33a)　Watching TV is fun.
(33b)　テレビを見ることは楽しい。

(34a)　It is almost impossible to tell those twins apart by appearance alone.
(34b)　あの双子を外見だけで見分けることは不可能に近い。

同じく「～すること」と訳されてはいても、「テレビを見ること」は一般的で、「・・・を見分けること」は特定的である。この「一般的／特定的」の区別が一つの文でよく分かる例が、

(35a)　I don’t dislike working, but I don’t want to work for this company.

(35b)　働くことは嫌いではないが、この会社では働きたくない。

である。2 つの下線部に注目してみよう。動名詞 working は「（業種・会社などを問わず）働くこと」という一般的なことであるのに対して、不定詞句 to work for this company は、「（他ならぬ）この会社で働くこと」という特定的なことで、「私」は、前者は嫌いではないが、後者はしたくない、と言っているのである。

2 つ目の違い、すなわち「過去志向／未来志向」については、次の例文を比較すると理解しやすいかもしれない。

(36a)　My dream is to be an astronaut.
(36b)　私の夢は、宇宙飛行士になることです。

(37a)　Being an astronaut is a wonderful career. 註 1
(37b)　宇宙飛行士（であること）は素晴らしい仕事です。

ここでも下線部に注目すると、不定詞 to be an astronaut は「未来志向」である。仮に「私」の夢が叶ったとして、「宇宙飛行士になる」のは未来のある時点だということ。一方、being an astronaut という動名詞句は「過去（ときに現在）志向」である。話者は、過去において宇宙飛行士であった（あるいは現在、宇宙飛行士である）ということである。

後者の「過去志向／未来志向」のコントラストは、remember, forget などを用いた文で顕著である。

(38a)　I remember seeing him in New York about 10 years ago.
(38b)　10 年ほど前、ニューヨークで彼に会ったことを覚えている。

(39a)　Please remember to water the flowers every morning.
(39b)　毎朝、花に水をやるのを忘れないでください。

動名詞句 seeing him in New York about 10 years ago は「過去志向」、つまり「・・・彼に会った」のは過去の出来事である。一方、不定詞句 to water the flowers the flowers every morning は「未来志向」、つまり「・・・花に水をやる」のは未来である。

上記の「一般的／特定的」・「過去志向／未来志向」の区別は、非常に多くのケースで有効である。例えば、「禁煙する」を英語で表現するとしたら、quit smoking が正しくて、*quit to smoke は誤りである。何故か？　過去においてタバコを吸っていた（そして現在もタバコを吸っている）人でなければ、「禁煙する」ことはできないからである、という説明が可能になる。次の例においても、

(40a)　The boy admitted to stealing the money.
(40b)　少年は、そのお金を盗んだことを認めた。

「過去の行為」でなければ、「やった」と認めることも「やっていない」と否認することもできないであろう。

それとは逆に、plan, hope, attempt, refuse, decide などの動詞は、本質的に「未来志向」なので、不定詞との相性が良い、ということになる。

(41a)　I plan to return to my family home during the spring vacation.
(41b)　春休みは帰省する予定です。

(42a)　She decided to apply for the scholarship.
(42b)　彼女はその奨学金に応募することに決めた。

現時点を基準にして考えると、「決心したのが 1 カ月前で、応募したのが 1 週間前」というふうに、decide と apply の両方とも過去の行為という場合もあり得るが、この文が伝えたいことはそうではない。「決心した」時点から見て、「応募する」のは未来の行為ということを表わしているのである。

では何故このような違いが生じたか、であるが、伊関（2013）の説明を引用する。

> 大変説得力のある説明が、大津（2004, p.62）によってなされている。
> 「動名詞は、もうすでにしていること、あるいは、今もしていることについて述べる場合に使うと書きました。なぜかというと、今していることについて述べる進行形と同じ-ing 形（現在分詞）を使っているからです。一方、不定詞は（今そのことをしているのではなく）これからそのことをする場合に使うというのはなぜでしょう。
> その理由を知るためには、英語の歴史をさかのぼってみる必要があります。歴史的には、不定詞を表す to は「～へ」という方向を表す前置詞の to と同じ源から発しています。そこで、不定詞の表す意味は、その動作の方向へ向かう、つまり、（今そのことをしているのではなく）これからそのことをする、ということになるのです。
> 意外に思われる方もいるでしょうが、それが歴史の面白さというものです。」と書かれている。
> ここでは、特に不定詞の表す意味について、歴史言語学の観点からの説明の有用性を強調していて、大変興味深い。現代英語の意味の解釈において、通時的な視点を持つことの重要性がうかがえる。ただし、動名詞の方の説明に対しては、少し疑問が残る。後述のように、動名詞が進行形と同じ-ing という形式をとっているので、今もしていることについ

て述べる場合に使われるということに関しては、筆者にも異論はない。しかし、もうすでにしていることについて述べる場合にも使われるということに関しては、-ing という形式からだけでは全く判断できないからである。その点についての説得力のある説明が是非ほしいところである。

伊関俊之（2013）　「動名詞を中心とした世界－不定詞および現在分詞との比較を中心に－」
6 ページ　『北見工業大学　人間科学研究　vol. 09』所収

圧倒的多数のケースで有効な「動名詞は過去志向／不定詞は未来志向」の区別ではあるが、これが当てはまらない場合があるので、注意が必要である。例えば、仮定法において、動名詞が主語となって条件節の代わりをしている場合である。

(43a)　Stopping this waste of fuel would save money.
(43b)　こういう燃料の無駄遣いをやめれば、お金の節約になるであろう。

(44a)　Creating less light would not only lead to less light pollution, but it would also help the environment in other ways.
(44b)　灯りを減らせば、光害軽減に繋がるだけでなく、他の点で環境を守ることにも役立つであろう。

「無駄遣いをやめる」のも「灯りを減らす」のも未来の行為である。何故この種の文では「過去志向／未来志向」が当てはまらないのか。筆者が考えるに、不定詞の制約に原因がありそうである。

有名なところでは、「不定詞は（動名詞とは違って）前置詞の目的語になれない」というものがあるが、「（上記のような構文では）不定詞は主語位置に来られない」という制約もある。そもそも不定詞がそのまま主語になる文（いわゆる仮主語の it を立てない文）はかなり出現頻度が低い。次のような、2 つの不定詞句を be 動詞で結んだ文以外は、稀である。

(45a)　To remain silent is to side with the oppressor.
(45b)　黙っていることは、圧制者に与することに等しい。

(46a)　To see her is to love her.
(46b)　彼女に会えば（誰でも）一目で好きになる。

意味的に未来志向であるため、本来なら不定詞を使いたいところだが、上記の制約があるためにそれが叶わず、似た意味を持つ動名詞を代役に立てた、というところではないだろうか。

● **註**

1　NASA（アメリカ航空宇宙局）初のヒスパニック系女性宇宙飛行士エレン・オチョア（Ellen Lauri Ochoa, 1958 年～）の言葉。https://www.brainyquote.com/quotes/quotes/e/ellenochoa419615.html

●参考文献

安藤貞雄（1986）　『英語の論理・日本語の論理』　東京：大修館書店。
池上嘉彦（1981）　『「する」と「なる」の言語学』　東京：大修館書店
池上嘉彦（1982）　「表現構造の比較―〈スル〉的な言語と〈ナル〉的な言語―」
『日英語比較講座　第 4 巻　発想と表現』.　編者：國廣哲彌　東京：大修館書店　所収
伊関俊之（2013）　「動名詞を中心とした世界－不定詞および現在分詞との比較を中心に－」
『北見工業大学　人間科学研究　vol. 09』（2013 年 3 月）所収
大津由紀雄（2004）　『英文法の疑問恥ずかしくてずっと聞けなかったこと』　東京：NHK 出版.
三浦陽一（2012）　「英語の人称代名詞について」、『南山大学　国際教育センター紀要　第 12 号』
（2012 年 3 月）所収

● 英文タイトル

A Comparative Study of Japanese and English Expressions (6)

● 英文要約

Japanese learners of English often find it difficult to translate English into Japanese, or Japanese into English even when the sentences used are beginning-level ones. This is partly because Japanese and English use different “conceptions” in building sentences.

First of all, this paper addresses the question: what lies behind the differences between Japanese and English conceptions? Then it discusses how the differences should be explained to students so that they can fully understand them.

This paper also treats “causative verbs” and “gerund vs. infinitve,” which puzzle most Japanese learners of English, in an attempt to find out how best to explain them to students so that they can make the best choice according to the situation.